MD（日本うつ病学会）
［指定演題］
プログラム

海外招待講演

教育講演1～6

大会企画シンポジウム1～10

自主企画シンポジウム1～5

委員会企画シンポジウム
- ・自殺対策委員会
- ・双極性障害委員会
- ・多職種連携委員会

学会奨励賞・下田光造賞 受賞講演

オンサイト	会場でセッションにご参加いただけます（会場名を記載しています）
ライブ	ライブ配信を行います（配信日時を記載しています）
オンタイム	録画のオンタイム配信を行います（配信日時を記載しています）
オンデマンド	オンデマンド配信を行います： 配信期間は、2021年7月8日（木）～7月31日（土） ライブ配信したセッションは、準備が整い次第オンデマンド配信を開始します

MD海外招待講演

オンデマンド

M-ILE　CANMAT/ISBD Guidelines for Treatment of Mixed States
CANMAT/ISBD ガイドライン：混合状態の治療について

座　長　渡邊 衡一郎　杏林大学医学部精神神経科学教室
演　者　Lakshmi N. Yatham　University of British Columbia in Vancouver

MD教育講演1

オンデマンド

M-EL1　ICD-11の気分症群：適正な診断を決めるための知識

演　者　神庭 重信　日本うつ病センター／飯田病院／九州大学名誉教授

MD教育講演2

オンデマンド

M-EL2　リチウムと私

演　者　寺尾　岳　大分大学医学部精神神経医学講座

MD教育講演3

オンデマンド

M-EL3　うつ病と訴訟

演　者　村松 太郎　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

MD教育講演4

オンデマンド

M-EL4　うつ病の血液バイオマーカー：特に脳内免疫細胞ミクログリアに着目して

演　者　加藤 隆弘　九州大学大学院医学研究院精神病態医学

MD教育講演5

オンデマンド

M-EL5　当事者・家族の想いを踏まえた気分障害の診療と研究：日本うつ病学会の未来

演　者　尾崎 紀夫　名古屋大学大学院医学系研究科

MD教育講演6

オンデマンド

M-EL6　本邦における気分障害治療における情報通信技術の活用の現状と展望

演　者　岸本 泰士郎　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

MD大会企画シンポジウム1

オンサイト　ライブ　オンデマンド

うつ病の認知機能障害と臨床

2021年7月8日（木）　8:40～10:20　第2会場「302」

オーガナイザー　馬場　元　順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院

【趣旨・狙い】

うつ病では多くの領域の認知機能が障害されるが、近年は神経認知に限らず社会認知とうつ病との関連も注目されている。そしてこうした認知機能障害の神経基盤も徐々にあきらとなり、特に神経画像研究では様々な知見が集積されてきている。うつ病の認知機能障害は寛解後にもその一部が残存し、これが社会機能や再発に影響することが知られている。このためうつ病治療においては寛解後の認知機能障害に対する薬物的・非薬物的アプローチの重要性が指摘されるようになった。本シンポジウムではこうしたうつ病における認知機能障害とその治療的アプローチについて、それぞれの専門家よりレクチャーしていただく。

座　長　松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科
馬場　元　順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院

M-S1-1　**うつ病の認知機能障害－神経認知から社会認知まで－**
前嶋　仁　順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院メンタルクリニック

M-S1-2　**うつ病・双極性障害の認知機能障害と機能画像**
松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学

M-S1-3　**大うつ病性障害の認知機能障害の評価法、治療的介入**
豊巻 敦人　北海道大学大学院医学研究院精神医学教室

M-S1-4　**うつ病の認知機能障害に対する薬物療法の役割**
堀　輝　福岡大学医学部精神医学教室

MD大会企画シンポジウム2

オンサイト　ライブ　オンデマンド

依存とうつ病：合併の実態・背景と治療

2021年7月8日（木）　11:00～12:40　第2会場「302」

オーガナイザー　樋口　進　国立病院機構久里浜医療センター

【趣旨・狙い】

従来、依存というともっぱら物質依存を指していたが、DSM-5およびICD-11から、依存にギャンブル症およびゲーム症という二つの行動嗜癖が加わった。一方で、いかなる依存であっても、他の精神障害が高い割合で合併することが知られている。うつ病はその中でも最も合併率の高い疾患の一つである。依存とうつ病の関係は複雑である。依存はうつ病の原因である場合、結果である場合、また、関係が判然としない場合がある。依存にうつ病が合併している場合、双方の治療や転帰に影響する。本シンポジウムでは、まず、アルコール、ギャンブル、インターネット・ゲームとうつ病の関係について、依存まで至らない危険な使用との関係も踏まえ、3名の演者に発表いただく。その中には合併のメカニズムや治療への影響等も含まれる。最後に、依存治療の中心的な位置を占めている認知行動療法について現在までの知見をまとめていただく。

座　長　樋口　進　国立病院機構久里浜医療センター

M-S2-1　**アルコールとうつ病**
杜　岳文　肥前精神医療センター

M-S2-2　**ギャンブル問題とうつの関係**
松下 幸生　国立病院機構久里浜医療センター

M-S2-3　**インターネット・ゲームとうつ病**
館農　勝　ときわ病院

M-S2-4　**アディクションへの認知行動療法**
原田 隆之　筑波大学／東京大学

MD大会企画シンポジウム3

オンサイト　ライブ　オンデマンド

双極性障害診療ガイドライン改訂進捗報告

2021年7月8日（木）　13:20～15:00　第2会場「302」

オーガナイザー　松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科

【趣旨・狙い】

現行の当学会双極性障害治療ガイドラインの初版は2011年で、その後DSM5の登場や新たな薬剤の追加等により版が重ねられ、2020年6月が最新の第4版である。ガイドラインの作成に関し、わが国では2011年より厚生労働省委託事業のEBM普及推進事業（Minds）が、エビデンスに基づいた診療ガイドライン作成を推奨し支援している。3月時点でMindsに従った診療ガイドラインは他の診療科を併せると300件を超えている。
こうした時代の流れに合わせ、2020年2月、本ガイドラインをMindsに従い全面改定することになり、現在その改訂作業中である。
本講演会では、本プロジェクトの概容および各セクションの進捗を各執筆リーダーが概説する。

座　長　加藤 忠史　順天堂大学医学部精神医学講座
松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科

M-S3-1　**双極性障害診療ガイドライン改訂の概容**
松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院神経精神科・心療内科

M-S3-2　**疾患の特徴**
小笠原 一能　名古屋大学医学部附属病院卒後臨床研修・キャリア形成支援センター／精神科

M-S3-3　**躁病エピソード**
本村 啓介　国立病院機構さいがた医療センター

M-S3-4　**双極性障害診療ガイドライン　抑うつエピソード**
田中 輝明　KKR札幌医療センター精神科

M-S3-5　**維持療法**
仁王 進太郎　東京都済生会中央病院

M-S3-6　**双極性障害ガイドライン（心理社会セクション）**
宗　未来　東京歯科大学市川総合病院精神科

M-S3-7　**周産期**
根本 清貴　筑波大学医学医療系精神医学

M-S3-8　**副作用とモニタリング**
鈴木 映二　東北医科薬科大学医学部精神科学教室

M-S3-9　**SR進捗、維持療法**
岸　太郎　藤田医科大学医学部精神神経科学講座

MD大会企画シンポジウム4

オンサイト　ライブ　オンデマンド

COVID-19が精神科にもたらした心理学的影響

2021年7月8日（木）　16:10～17:50　第2会場「302」

オーガナイザー　菱本 明豊　横浜市立大学

【趣旨・狙い】
COVID-19の感染拡大は今も続いており、先の見えない状況にある。COVID-19パンデミックは私たちに公衆衛生上の脅威のみならず経済活動を含む社会構造そのものに多大なインパクトを与え、人としての価値観や対人関係性の変化といった人間社会の基盤を根底から揺さぶる災害となっている。COVID-19の心理的負荷は個々のストレス耐性や社会環境や援助耐性など、様々な要因の影響を受けて一様でない。本シンポジウムではパンデミック初期から現在に至るまでフロントラインにいる医療関係者のみならず、脆弱性を有す学生や妊産婦などを対象とした幅広いCOVID-19による心理学的影響の調査結果を各地域から報告していただく。

座　長　菱本 明豊　横浜市立大学
石黒 浩毅　山梨大学

M-S4-1　**COVID-19パンデミックが流行初期に病院職員にもたらした心理的影響**
井出 恵子　横浜市立大学附属病院精神科／横浜市立大学医学部精神医学教室

M-S4-2　**COVID-19パンデミック下における発達特性を持つ学生の動向 ～オンライン受講による影響**
鈴木 亜矢　山梨大学学生サポートセンター

M-S4-3　**兵庫県におけるCOVID-19パンデミックによる病院職員・大学生の心理的影響について**
青山 慎介　神戸大学大学院医学研究科精神医学分野

M-S4-4　**コロナ災禍による産後うつへの影響**

石黒 浩毅　山梨大学大学院総合研究部精神神経医学講座／山梨大学附属病院遺伝子疾患診療センター／山梨大学附属病院産後ウェルビーングセンター

MD大会企画シンポジウム5

オンサイト　ライブ　オンデマンド

コロナ禍でのリワークデイケアの方策と在宅勤務者の支援　～有効性と限界～

2021年7月8日（木）　18:30～20:30　第2会場「302」

オーガナイザー　近藤　智　目白大学保健医療学部精神科領域

【趣旨・狙い】

リワークデイケアは、うつ病復職者が体系的な治療構造のもと、再発予防を目標に、一人ひとりに合ったストレスの対処法や働き方を身に付ける場である。一方、復職を果たすものの、復職後の再予防や自分を守る術が不十分であると、再発のリスクファクターとなり、再休職に追い込まれる。

2020年度を振り返り、このコロナ禍において、VUCAの時代と言われ、多くの企業は就業規則や働き方を見直す中、リワーク運営においても様々な変化が見られた。

そこで通所者、またリワーク運営双方で、何が変わったのか。

上記を踏まえ、①コロナ禍でのリワーク通所者の変化の特徴およびプログラム支援の変更点とは、②リワーク継続のために何が必要であったか論じ、③在宅勤務を継続するためのメンタル不調に陥らないための方策について検討する。

当日は、うつ病休職者や在宅勤務者を含む、メンタルヘルスに関する治療・支援のさまざまな観点から議論を深めていく。

座　長　近藤　智　目白大学保健医療学部精神科領域

M-S5-1　**コロナ禍における当院リワークプログラムの変化**

武井 勇樹　医療法人社団柏水会柏メンタルクリニック

M-S5-2　**withコロナにおける復職後の在宅勤務におけるメンタルヘルス対策と予防**

近藤　智　目白大学保健医療学部精神科領域

M-S5-3　**都市部リワークデイケア運営の特徴**
～危機的状況をいかに乗り越えてきたか～

窪田 昌也　三軒茶屋診療所東京リワークセンター

M-S5-4　**ストレスケア病棟におけるオンラインツールを用いたリワークプログラムの展開**

松本　敦　医療法人社団心癒会しのだの森ホスピタル

MD大会企画シンポジウム6

オンサイト　ライブ　オンデマンド

MD委員会企画：ニューロモジュレーション委員会

うつ病のニューロモジュレーション－ことはじめ－

2021年7月9日（金）　9:00～10:40　第1会場「301」

オーガナイザー　岡本 泰昌　広島大学大学院精神神経医科学

【趣旨・狙い】

昨今、臨床場面では電気けいれん療法（mECT）が難治性うつ病の治療として重要な地位を確立し、反復経頭蓋磁気刺激療法（rTMS）がうつ病に対して保険適用となった。さらなるうつ病に対するニューロモデュレーションの展開も進み、わが国ではシータバースト刺激（TBS）、経頭蓋直流電気刺激（tDCS）、ニューロフィードバック（NFB）を用いた研究も行われている。海外では難治性うつ病に対する迷走神経刺激（VNS）や脳深部刺激（DBS）を用いた治療開発も進んでいる。ニューロモジュレーション委員会はニューロモジュレーションに関する議論を積極的に行い、臨床応用を推進することを目的に2020年度より新設された。今回、本委員会の第一回企画シンポジウムとして、「うつ病のニューロモジュレーション－ことはじめ－」と題して、わが国の第一人者をお招きし、今後の臨床応用や研究展開に向けた議論の嚆矢としたい。

座　長　三村　將　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室
松尾 幸治　埼玉医科大学医学部精神医学／埼玉医科大学病院 神経精神科・心療内科

M-S6-1　**電気けいれん療法（ECT）の過去・現在・そして未来**
竹林　実　熊本大学大学院生命科学研究部神経精神医学講座

M-S6-2　**うつ病へのニューロモデュレーション療法：TMS**
鬼頭 伸輔　国立精神・神経医療研究センター／東京慈恵会医科大学精神医学講座

M-S6-3　**うつ病における経頭蓋直流電気刺激法（Transcranial direct-current stimulation: tDCS）の現状と将来**
西田 圭一郎　関西医科大学精神神経科学教室

M-S6-4　**fMRIニューロフィードバックのうつ病治療への応用**
岡田　剛　広島大学大学院医系科学研究科精神神経医科学

MD大会企画シンポジウム7
うつ病の栄養学的問題と治療的役割

オンサイト　ライブ　オンデマンド

2021年7月9日(金)　9:30～11:10　第2会場「302」

オーガナイザー　功刀　浩　帝京大学医学部精神神経科学講座／国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部

【趣旨・狙い】
近年、うつ病と関連する食事や栄養学的問題に関する知見が蓄積され、栄養学的アプローチは薬物療法、精神療法と並んでうつ病治療の重要な柱の１つになりつつある。これは、うつ病が他の生活習慣病と同様に、食生活などのライフスタイルが大きく関与することによる。本シンポジウムでは、うつ病の病態仮説と食事・栄養学的因子との関連、疫学的研究によって得られた最新の知見、うつ病と糖尿病との関係、腸内細菌などの腸内環境との関連などのトピックについて、当該分野の研究成果ついて紹介し、治療的役割について論じる場としたい。

座　長　功刀　浩　帝京大学医学部精神神経科学講座／国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部
吉田 寿美子　国立精神神経医療研究センター

M-S7-1　**うつ病の病態仮説と栄養**
功刀　浩　帝京大学医学部精神神経科学講座／国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第三部

M-S7-2　**うつ病と糖尿病**
吉田 寿美子　国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部

M-S7-3　**うつとn-3系多価不飽和脂肪酸**
浜崎　景　群馬大学大学院医学系研究科公衆衛生学分野

M-S7-4　**職域における抑うつと栄養・食生活**
南里 明子　福岡女子大学国際文理学部食・健康学科

M-S7-5　**うつ病と腸内細菌－腸－脳相関**
相澤 恵美子　仙台白百合女子大学人間学部健康栄養学科

MD大会企画シンポジウム8
トラウマインフォームドケアとその展開

オンサイト　ライブ　オンデマンド

2021年7月9日(金)　16:30～18:10　第2会場「302」

オーガナイザー　西　大輔　東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野

【趣旨・狙い】
虐待に代表される小児期逆境体験の頻度の高さや心身への悪影響が明らかになるにしたがって、すべての人にトラウマ体験の影響があるかもしれないということを念頭に置いてケアすることを目指すトラウマインフォームドケア(TIC)の重要性が認識されるようになってきている。しかし、まだTICの実践がわが国で十分に広まっているとは言えない。本シンポジウムでは、まずTICの基本的な考え方を共有したうえで、精神科医療機関での実践例、ソーシャルワークの観点から見た活用例、そして精神保健福祉センター・保健所における現状をまとめた調査結果を紹介する。そのうえで、それぞれの領域においてTICをどのように展開していくことが可能かを考えていきたい。

座　長　西　大輔　東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野

M-S8-1　**トラウマインフォームドケアの総論**
亀岡 智美　兵庫県こころのケアセンター

M-S8-2　**精神科医療機関でのTICの実践**
大津 絵美子　吉祥寺病院

M-S8-3　**ソーシャルワーク領域におけるTIC実践の一例**
大岡 由佳　武庫川女子大学

M-S8-4　**精神保健福祉センター・保健所から見たTIC**
臼田 謙太郎　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部

MD大会企画シンポジウム9
がん患者の自殺予防

オンデマンド

オーガナイザー　河西 千秋　札幌医科大学医学部神経精神医学講座

【趣旨・狙い】
がん患者は、自殺のハイリスク・グループであり、わが国のがん医療の骨太方針である第3次がん対策推進基本計画(2018年)において、初めて自殺予防の必要性が明示されるところとなった。本シンポジウムでは、がん患者における自殺問題を概説し、自殺のリスク因子、自殺予防に関する先行研究の状況、そして本邦で開始された「がん患者の自殺予防とメンタルヘルス支援のための介入研究」について解説し、併せて、実際の患者支援について事例提供を行う。がん患者の自殺問題については、まだ本学会会員間でも広く周知されているとは言えず、また、自殺予防のための介入方略もまだ世界的に確立されていない状況であることから、オーガナイザーは、本シンポジウムが、がん患者の自殺問題を広く理解する機会となること、また、自殺予防対策を、そしてひいてはがん患者のメンタルヘルス支援を推進していくための一助になることを期待する。

座　長　大西 秀樹　埼玉医科大学国際医療センター
藤澤 大介　慶應義塾大学医学部医療安全管理部／精神・神経科学教室

M-S9-1　**がん医療における自殺問題**
河西 千秋　札幌医科大学医学部神経精神医学講座

M-S9-2　**がん患者の自殺リスク因子と自殺予防介入研究のレビュー**
川島 義高　明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻／国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神神薬理研究部

M-S9-3　**がん患者の自殺予防とメンタルヘルス支援のための介入研究**
石井 貴男　札幌医科大学医学部神経精神医学講座

M-S9-4　**がん患者に対するケース・マネジメント介入の実際**
岩木 敦子　札幌医科大学附属病院神経精神科

MD大会企画シンポジウム10

オンデマンド

うつ病看護ガイドラインの目指すもの　－現状と今後の課題－

オーガナイザー　杉山 暢宏　信州大学医学部保健学科

【趣旨・狙い】
日本うつ病学会が『うつ病看護ガイドライン』を公表して1年となる。臨床実践や看護教育において十分に普及し活用されるためには、更なる啓発が必要である。
本シンポジウムではガイドライン執筆者に登壇を依頼し、担当箇所の概要と活用のヒントについて解説いただくこととした。執筆者の生の声でエッセンスを解説いただけば、シンポジウム参加者が抱える臨床疑問と共鳴し、ガイドラインを参照してみようという強い動機となるだろう。本シンポジウムがひとつの誘いとなり、うつ病看護ガイドラインがさらに多くの読者を獲得することを期待したい。
一方執筆者の側も、本ガイドラインの編さんを通じて改めて認識した問題があった。各著者が執筆を通して感じた問題点や今後の課題についてそれぞれのお立場から自由にご発言いただき、広く共有する機会としたい。シンポジウム参加者から建設的なコメントを募り、今後の改訂に役立てたいと考えている。

座　長　杉山 暢宏　信州大学医学部保健学科
野末 聖香　慶應義塾大学看護医療学部

M-S10-1　**うつ病看護の原則とアセスメント**
野末 聖香　慶應義塾大学看護医療学部

M-S10-2　**うつ病看護ガイドラインの評価と更新に向けた検討**
河野 佐代子　慶應義塾大学病院

M-S10-3　**周産期のうつ病看護**
玉木 敦子　神戸女子大学看護学部

M-S10-4　**うつ病看護ガイドライン「老年期のうつ病看護」を担当して**
長谷川 雅美　新潟県立看護大学

M-S10-5　**うつ病の心理教育と家族支援**
香月 富士日　名古屋市立大学大学院看護学研究科

指定発言1　菊地 俊暁　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

指定発言2　木村 洋子　同志社女子大学看護学部

MD自主企画シンポジウム1
侵入思考と感情障害

オンサイト　ライブ　オンデマンド

2021年7月9日(金)　11:50～13:30　第2会場「302」

オーガナイザー　貝谷 久宜　医療法人和楽会パニック症研究センター
橋本　佐　国際医療福祉大学医学部精神医学教室／千葉大学大学院医学研究院精神医学

【趣旨・狙い】
侵入思考とは望まない非自発的で、反芻する思考である。外傷後ストレス障害や強迫症では、侵入思考は診断基準のひとつであり、心理療法をはじめ治療で取り扱う症候である。しかし、侵入思考は気分障害や不安症など他の疾患でも認める症候・心理学的現象である。本シンポジウムでは、侵入思考・反芻の上位概念にある反復思考、マインドワンダリングといった最新の心理学を概説し、気分障害の侵入思考に関する研究成果や、侵入思考に関するうつ・不安の新しい症候、不安・抑うつ発作、について発表する。さらに、治療として侵入思考の反芻に焦点を当てた認知行動療法について最新知見を紹介する。本シンポジウムを通じて、うつ病・双極性障害患者における侵入思考と感情の知識を深め、新しい治療を学ぶことが期待できる。

座　長　貝谷 久宜　医療法人和楽会パニック症研究センター
橋本　佐　国際医療福祉大学医学部精神医学教室／千葉大学大学院医学研究院精神医学

M-SS1-1　**反復思考と執着・無執着**
杉浦 義典　広島大学

M-SS1-2　**気分障害における侵入思考**
橋本　佐　国際医療福祉大学医学部精神医学教室／千葉大学大学院医学研究院精神医学

M-SS1-3　**不安・抑うつ発作の正体**
正木 美奈　医療法人和楽会なごやメンタルクリニック

M-SS1-4　**反芻に取り組む：反芻焦点化認知行動療法**
中川 敦夫　慶應義塾大学医学部精神神・神経科学教室

MD自主企画シンポジウム2

オンサイト　ライブ　オンデマンド

うつ病治療ガイドラインが明らかにした日本のうつ病の診療実態と課題

2021年7月9日(金)　13:40～15:20　第1会場「301」

オーガナイザー　橋本 亮太　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

【趣旨・狙い】

2016年には児童思春期のうつ病、うつ病患者の睡眠障害とその対応が追加された。2020年には、Minds診療ガイドラインの手引きに準拠する形で高齢者のうつ病治療ガイドラインが作成され公開された。このようにますます充実するうつ病治療ガイドラインについての実臨床への普及や教育、そして検証についてはまだまだ十分ではないことから2015年にうつ病学会と神経精神薬理学会との合同にてEGUIDEプロジェクトが発足し、ガイドラインの講習による普及・教育を行い成果をあげてきた。一方で、うつ病治療において例えば抗うつ薬の単剤治療率が施設によって0～100%と大きくばらついている実態を報告し、その課題も明らかにしてきた。本シンポジウムでは、このようなうつ病治療ガイドラインが明らかにした日本のうつ病の診療実態と課題について概説する。

座　長　渡邊 衡一郎　杏林大学医学部精神神経科学教室
橋本 亮太　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

M-SS2-1　**うつ病治療ガイドラインとは**
伊賀 淳一　愛媛大学大学院精神神経科学講座

M-SS2-2　**うつ病治療ガイドラインの普及**
山田　恒　兵庫医科大学精神神科神経科学講座／国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

M-SS2-3　**日本のうつ病の治療実態と課題**
飯田 仁志　福岡大学医学部精神医学教室

M-SS2-4　**うつ病診療の将来**
古郡 規雄　獨協医科大学精神神経医学講座

指定発言　樋口 輝彦　一般社団法人日本うつ病センター(JDC)

MD自主企画シンポジウム3

オンサイト　ライブ　オンデマンド

抑うつの発達的理解と抑うつを抱える養育者の支援を考える

2021年7月9日(金)　16:00～17:40　第1会場「301」

オーガナイザー　岡田　俊　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部

【趣旨・狙い】

乳児は養育者とのアタッチメントを形成し、やがて養育者を安心基地としながら分離を果たしていく。しかし、愛着対象が存在しない、あるいは、愛着対象からの長期分離は抑うつを呈することが知られている。また、逆境的な養育環境は、青年期以降の精神障害発症リスクとも関連する。うつ病の発達的理解には、発達障害などの子ども側のリスク要因、養育環境の理解が必要であるし、その介入にも親の養育支援や子どもへの自尊心を高める関わりが求められる。COVID-19感染拡大に伴う影響は、子ども、親ともに多大なインパクトを与えており、いまの時代だからこそ抑うつを改善するための子と養育者の支援について検討を深めたい。

座　長　岡田　俊　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部
小平 雅基　総合母子保健センター愛育クリニック

M-SS3-1　**養育者との愛着形成と分離・離別に伴う抑うつ**
渡部 京太　広島市こども療育センター

M-SS3-2　**COVID-19感染拡大下における発達障害のある子の不安・抑うつと育児ストレス**
岡田　俊　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部

M-SS3-3　**養育困難な子どもの親の抑うつと養育支援：PCITを中心に**
小平 雅基　総合母子保健センター愛育クリニック

M-SS3-4　**抑うつ的な子どもの自己肯定感を高める介入**
岩垂 喜貴　駒木野病院

MD自主企画シンポジウム4

オンサイト　ライブ　オンデマンド

うつ病の薬物治療における出口戦略 ～医師と薬剤師の協働～

2021年7月9日（金）　18:50～20:30　第2会場「302」

オーガナイザー　吉尾　隆　公益財団法人住吉偕成住吉病院／昭和大学薬学部病院薬剤学講座

【趣旨・狙い】

うつ病の薬物治療では、抗うつ薬以外にも抗不安薬、睡眠薬、さらには気分安定薬や抗精神病薬も使用される。うつ病の薬物治療では、抗うつ薬の効果が発現する3～4週間の間、多くの症例で抗不安薬や睡眠薬が併用され、寛解に達した後も継続されている。また、これらの薬剤は多剤併用や漫然とした長期処方が行われている場合があり、その背景要因として精神科薬物療法の出口戦略に関する情報や認識の不足が挙げられる。したがって、うつ病の薬物治療における出口戦略においても、治療標的となる精神疾患が寛解・治癒した後に安全な長期維持療法を選択するか、減量中止を試みるかの医療者・患者間での共同意志決定が重要となる。抗うつ薬の継続を選択する場合には、医師のみではなく薬剤師による服薬管理も必要となってくる。本シンポジウムでは、医師と薬剤師による協働により、うつ病治療における薬物治療の継続と減量・中止に関し、ディスカッションする。

座　長　三島 和夫　秋田大学大学院医学系研究科精神科学講座
吉尾　隆　公益財団法人住吉偕成住吉病院／昭和大学薬学部病院薬剤学講座

M-SS4-1　**うつ病の薬物治療における医師から見た抗うつ薬の出口戦略**
加藤 正樹　関西医科大学精神神経科学講座

M-SS4-2　**うつ病の薬物治療における医師から見たベンゾジアゼピン系薬の出口戦略**
稲田　健　東京女子医科大学医学部精神医学講座

M-SS4-3　**うつ病の薬物治療における薬剤師から見たベンゾジアゼピン受容体作動薬の出口戦略**
江角　悟　岡山大学病院薬剤部

M-SS4-4　**うつ病の薬物治療における薬剤師から見た抗うつ薬の出口戦略**
吉尾　隆　公益財団法人住吉偕成住吉病院／昭和大学薬学部病院薬剤学講座

MD自主企画シンポジウム5

オンデマンド

クロストーク　TMS×うつ病×ECT

オーガナイザー　諏訪 太朗　京都大学医学部医学研究科脳病態生理学教室（精神医学）

【趣旨・狙い】

反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）と電気けいれん療法（ECT）は共にうつ病の臨床において、薬物療法の効果が不十分であったり、副作用が問題となる場合に使用が考慮されるニューロモデュレーションである。しかしながら精神科領域においてrTMSが一般の保険診療として用いられるようになってからは日が浅く、うつ病診療において両治療をどのように使い分けるべきかの判断については未だ手探りの状態にある。

本シンポジウムでは、rTMSとECTのストロングポイント/ウイークポイントについて現時点で明らかとなっているエビデンスを概説し、現場での使い分けの現状について、rTMSとECT双方に臨床経験を持つ演者より症例を挙げて報告する。また、両治療の根本的な違いである作用機序について、基礎研究からの知見も交えて現在までの到達点を概説する。

両治療の使い分けや相補的な使用についての議論を通して、これからのうつ病治療戦略における両治療の位置づけを示したい。

座　長　中村 元昭　昭和大学発達障害医療研究所
獄北 佳輝　関西医科大学精神神経科学教室

M-SS5-1　**rTMSのストロングポイントとウイークポイント**
松田 勇紀　東京慈恵会医科大学精神医学講座

M-SS5-2　**うつ病に対するECTの長所と短所**
川島 啓嗣　京都大学医学部附属病院精神科神経科

M-SS5-3　**rTMSとECTの臨床経験**
伊津野 拓司　神奈川県立精神医療センター

M-SS5-4　**rTMSの作用機序とうつ病の脳科学反復経頭蓋磁気刺激の刺激効果指標の確立と治療最適化に向けて**
筒井 健一郎　東北大学大学院生命科学研究科脳神経システム分野

M-SS5-5　**作用機序仮説からみたけいれん療法と脳刺激療法**
諏訪 太朗　京都大学医学部医学研究科脳病態生理学教室（精神医学）

MD委員会企画シンポジウム[自殺対策委員会]

オンデマンド

コロナ禍における地域の自殺予防実践活動

オーガナイザー　張　賢徳　帝京大学溝口病院精神科

【趣旨・狙い】

最近では様々な分野でevidence-basedが言われ始めた。2020年からのコロナ禍の中で、政治家からもevidence-based policy-makingを唱える人が出てきた。ある標的課題の解決に向けて、闇雲に行動するよりもエビデンスを重視する世の流れはよいことである。しかし、それが行き過ぎた時の弊害もある。その際たるものが「エビデンスが無いからダメ」という考え方だ。エビデンスに対して「創出する」という動詞が使われることがあるが、これが誤解を生むのではないだろうか。エビデンスは何もないところから生み出されるのではない。エビデンスとは、ある特定の物質や行為に対して、その有効性が「確認」された結果のことを指す。つまり、エビデンスの元になるpracticeがまずありきなのだ。何事においてもscience（エビデンス）とpractice（実践活動）のバランスが大切である。特に自殺行動のような複雑な事象には様々な予防実践活動があり得る。今回は実践活動に焦点を当て、より良い実践活動について考える機会としたい。

座　長　張　賢徳　帝京大学溝口病院精神科
太刀川 弘和　筑波大学医学医療系災害・地域精神医学

M-SS-1　**自殺予防の実践活動（総論）**
森山 花鈴　南山大学社会倫理研究所／南山大学法学部

M-SS-2　**電話相談の自殺予防実践活動**
東内 祐広　認定NPO国際ビフレンダーズ東京自殺防止センター

M-SS-3　**自殺企図者の救護実践活動**
藤藪 庸一　白浜レスキューネットワーク

M-SS-4　**自殺未遂者の地域支援活動－川崎市のモデル事業について－**
高井 美智子　埼玉医科大学

MD委員会企画シンポジウム[双極性障害委員会] オンサイト ライブ オンデマンド

双極性障害患者さんが直面する困難を乗り越える

2021年7月8日(木)　11:40～13:20　第1会場「301」

オーガナイザー　加藤 忠史　順天堂大学医学部精神医学講座

【趣旨・狙い】

2019年12月以降、新型コロナウィルス感染症は短期間で全世界に広がり、感染者・死者数の増大に加え、感染に対する不安や恐怖、差別や偏見といった様々な問題が生じています。こうした困難に直面しているのは、もちろん双極性障害患者さんも例外ではありません。本来、双極性障害は再発率、自殺率の高い疾患であることに加え、昨今の新型コロナウィルス感染症の問題に限らず、妊娠・出産などのライフイベント、高齢化といった困難を乗り越えていく必要があります。本シンポジウムにおいて、双極性障害患者さんが生涯において直面しうる困難を取り上げ、各専門家の先生方に克服への道筋をご提示頂くことで、双極性障害診療の未来に繋がることを願っています。

座　長　加藤 忠史　順天堂大学医学部精神医学講座
宗　未来　東京歯科大学市川総合病院精神科

M-BS-1　**双極性障害における自殺予防**
張　賢徳　帝京大学溝口病院精神科

M-BS-2　**双極性障害の社会リズム療法が、コロナ禍の“巣ごもりうつ”にも特効薬!?：たった“5つ”の生活チェックで、明日からできる時間生物学の臨床応用**
宗　未来　東京歯科大学市川総合病院精神科

M-BS-3　**高齢者の双極性障害～器質的背景と認知症との関連性**
馬場　元　順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院／順天堂大学大学院医学研究科精神・行動科学

M-BS-4　**妊娠・出産を乗り越える**
根本 清貴　筑波大学医学医療系精神医学

M-BS-5　**経過が安定しない双極性障害の薬物療法について**
菅原 裕子　関西労災病院精神科／大阪大学大学院医学系研究科精神医学講座

MD委員会企画シンポジウム[多職種連携委員会]

オンデマンド

地域におけるメンタルヘルス　～誕生からターミナルケアまで～

オーガナイザー　山口 律子　MDA-JAPAN（うつ・気分障害協会）

【趣旨・狙い】
周産期から終末期まで地域におけるメンタルヘルス支援について考える企画です。
周産期から母子保健におけるメンタルヘルス活動の視点、保健所でのうつ病家族支援事業が、アルコール問題相談やひきこもり家族支援、統合失調症地域家族会、育児支援などと連携することによって住民のニーズにマッチした地域精神保健サービスが展開できること、在宅でのターミナルケアを実践している内科医の視点からの終末期を迎えた当事者と終末期を支える家族・支援者側のメンタルヘルスについて、実践的な活動の中での報告です。

座　長　山口 律子　MDA-JAPAN（うつ・気分障害協会）
　　藤吉 晴美　吉備国際大学

M-CS-1　**ものがたりという視点と他者理解**
佐藤 伸彦　ナラティブホーム

M-CS-2　**地域精神保健課題の多様化とうつ病家族教室の連携促進機能**
徳丸　享　立正大学心理学部

M-CS-3　**子育て中の家族を開く対話**
門間 晶子　名古屋市立大学大学院看護学研究科

MD学会奨励賞・下田光造賞 受賞講演

オンサイト　ライブ　オンデマンド

2021年7月9日（金）　14:50～15:50　第2会場「302」

座　長　三村　將　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

1. 学会奨励賞

医学分野

MP2-2　治療抵抗性うつ病に対する反復経頭蓋磁気刺激療法による左背外側前頭前野－右扁桃体間の機能的結合性の改善

演　者　和田 真孝　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

MP3-16　大うつ病性障害における悲観的な未来性思考に関与する前頭極の活動

演　者　片山 奈理子　慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

医療保健分野

MP6-2　COVID-19感染症治療に従事する医療従事者のメンタルヘルスの実態

演　者　津山 雄亮　札幌医科大学保健管理センター

2. 2021年 下田光造賞

KS　**Perinatal depression and anxiety of primipara is higher than that of multipara in Japanese women**

演　者　中村 由嘉子　名古屋大学大学院医学系研究科精神医学分野